

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K06712

研究課題名（和文）和室の変容と存在基盤を考慮した現代住宅の計画論導出

研究課題名（英文）Planning Theory on Housing focused on Tatami-room Transfiguration and Significance

研究代表者

鈴木 義弘（SUZUKI, Yoshihiro）

大分大学・理工学部・教授

研究者番号：30244156

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：近代化の当初から日本住宅の伝統性は封建的あるいは非合理的であるとの改良論を根拠に見直しを求められてきたが、いまだに履き替えの慣習は維持されながら、和室は継承されている。しかし、生活の西洋化が普及するなかで、例えば1922年に提案された家族共用空間を最重視する居間中心型住宅が、近年によりやく急増を示し、相対的に和室の優先性が大幅に低下しているのであるが、わが国の住まい方の転用性・柔軟性・多様性に基づく住生活様式は、和室の存在によりその自由度が保証されてきたのであると評価することができる。本研究は、消失が危惧される和室について、現代における居住者の住要求と存在基盤を解明するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代における和室の存在基盤を、平面類型と居住者選好の相関から典型的に把握した結果、「伝統性」「転用性」「融通性」「補完性」に大別することができ、居室の機能分化とは対極の自由度の高さが認められるが、都市性によって差異は生じているが、従来の生活慣習を継続的に維持する「伝統性継承」や、ライフステージの変化に応じて、一旦は私室化させながらも、その後「伝統性回帰」を図ろうとする場合や、逆に私室化に向かう場合などが認められた。また、独立した子息の一時的な帰宅や同居などの事例もみられ、住様式の変化を許容する貴重な空間構成要素として高く評価できることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： From the modernization period in the Meiji-ishin, advanced public opinion suggested that Japanese traditional housing have to be changed to Western living style. Now a days, in Japanese housing "tatami-room" is decreasing gradually. Conventionally "tatami-room" as it called "zashiki" was superiority position of all rooms in house, but recently we can see that it is supplementary position of living-room or other common rooms. However, we have inherited various custom for example changing the shoes or "tatami-room" style and so on. This research clarified the significance of existence "tatami-room" by classification housing-plan and residents-requirement from the view of field work. And through considering about this theme, we suggest the theory of planning to make flexible life style different from functionalization.

研究分野：建築計画

キーワード：和室 座敷 床の間 タタミ 住宅

## 1. 研究開始当初の背景

### <供給実態からみた和室の構成>

近代日本住宅は、接客本位制から家族本位への転換、ユカ座からイス座への合理化、居室の機能分化、家事労働負担の軽減が強く提起され、これらの問題点を徐々に克服する過程で中廊下型住宅という独自の平面構成を創出するに至った。

その後、洋風化が進行するが、戦後もしばらくは和室2室の続き間座敷をもち、2階居室も和室で構成されている事例が多く、申請者によるこれまでの調査研究によれば、1980年代初頭の分譲住宅においても、約3割はこの続き間座敷が供給されていた。しかし、ことに近年では、和室の存亡すら危ぶまれる状況へと推移していることが指摘できる。

和室の平面構成に関する現在にいたる主要な変容は以下の点である。

- ・和室数の減少： 和室を有する住宅が9割を超えていたが、ほぼみられなくなった
- ・床の間の減少： 和室のしつらえのなかも、床の間をもつものが激減している
- ・リビングルームへの従属空間化： 和室への動線は、リビングルームからしか和室にアクセスできないもの（「一方向型」と呼称）が急増している
- ・和室面積の縮小： 居室面積水準が向上に対して、4帖半の出現率が高まっている

すなわち、従来は日本文化の象徴的空間であったといえる和室は、供給実態の上からは、もはやリビングルームの従属的空間へと変わってきている

### <居住者志向からみた和室の存否>

つづいて実施した北海道から九州にいたる全国10地域の住宅団地での訪問調査（511件）において、平面構成についての居住者の選好アンケートを行った。すなわち、2年以上の居住歴のある住まい手に対して望ましいと考える平面構成を尋ね、現状の平面構成との一致不一致をとらえようとしたものである。これによると、両者に以下の乖離のあることが明らかとなった。

- ・和室断念層の存在： 和室をもたない世帯の約4割が和室を求めている
- ・和室数拡大の志向： 和室1室型の世帯は2室型を希望し、和室をもたない世帯は1室型ないしは2室型を求める傾向にある
- ・和室とリビングルームとの分離志向： リビングルームと連続しない和室構成の満足度が高い

住宅の供給実態と居住者の志向は必ずしも一致せず、和室はリビングルームとは分離させ、室数も拡大させたいという居住者志向があり、前述した傾向とは逆に、分離・拡大志向にある。

## 2. 研究の目的

- 1) 現代における和室の有用性の類型的把握
- 2) わが国独自の居室の転用性に着目した和室の柔軟性・多様性の解明
- 3) ライフステージの対応した住まい方の可変性の分析考察

## 3. 研究の方法

訪問詳細調査を実施し、以下の項目についてのデータ採取による分析・考察を行った。

- 1) 住まい方調査： a.家族構成・居住履歴などの基本的な属性、b.和室での行為内容、c.接客行動、d.就寝室の経年変化
- 2) 入居後評価調査： 選好について、和室に求める用途・イメージなどのアンケート調査
- 3) 居住者ニーズの類型的把握： 上記の調査に基づく予備的な分析、居住者ニーズについての類型的把握による現状の平面構成と選好に関する関係性の考察
- 4) 集合住宅を対象として研究領域の拡張： 戸建て住宅の研究に加えて、集合住宅の和室設置状況も調査し、現状における実態の把握と計画課題についての分析

## 4. 研究成果

### (1) 和室ニーズの類型と構造分析 <2017年>

大分市内の過去20年以内に分譲開始された計画戸数400戸以上の郊外型3団地を対象に、108件の有効データを収集し、①住宅および家族概要、②居住する住宅と選好する和室の平面類型、③床の間の有無と要否、④和室の使われ方、⑤和室の希望用途の関係性の分析考察を行った。

まず、和室温存傾向の強い点が指摘できる。和室の平面構成を、5タイプに分類し、居住している（取得した）平面構成と選好との関係を捉えると＜図1＞、一致・不一致がそれぞれ約半数であり、現状と希望に乖離が改めてみとめられる。不一致の要因としては、和室不要層の存在が挙げられ、加えて「分離型」居住だが和洋続き間である「双方向型」を選好する「連続・縮小志向」もみられるが、和室を必要とする世帯は概して「分離・拡大志向」が多数を占める。

ニーズ	居住プラン					計
	続き間 4(3.7%)	分離型 28(25.9%)	双方向型 39(36.1%)	一方向型 28(25.9%)	和室なし 9(8.3%)	
選好プラン	続き間 11(10.2%)	1 1	1 1	5 3	1 2	2 5
	分離型 29(26.9%)	1	16 7	4 6	2 4	7 10
	双方向型 46(42.6%)		2 7 5	5 22 7	3 5 7	10 19
	一方向型 8(7.4%)		1	3 7	3 1	3 1
	和室なし 14(13.0%)		3	6	5	14
計	2 1	2 13	9 11	9 10	9 1	22 36
	4 1	28 3	39 8	28 2	9 2	108 16

図1 居住プランと選好プランの関係

居住と選好プランの「一致層」について、同質な属性や志向、すなわち、床の間の要否、和室の用途、ライフステージなどについての共通点は認められない。居住者のライフステージの変化や求める住様式の違いによって、和室平面構成の定型や標準はもはや成立しない。しかし、各類型が多様に混在するなかで見出される現代における和室のニーズを明らかにしたく＜図2＞。

- 1) 和室の「伝統性」・「転用性」を求める世帯は、従来の「座敷」にみられる独立性とともに、LDKからアクセスのしやすい和洋続き間の連続性をより高く評価する傾向も併せもつ。
- 2) 床の間は不要だが接客専用室を想定する場合、居住・選好プランの一致率は極めて高い。
- 3) 「一方向型」は、一致層である7件だけをみても現状で和室の使途が不明確な世帯が6件を占めており、住みこなしには制約が大きく、有用性は認めがたい。

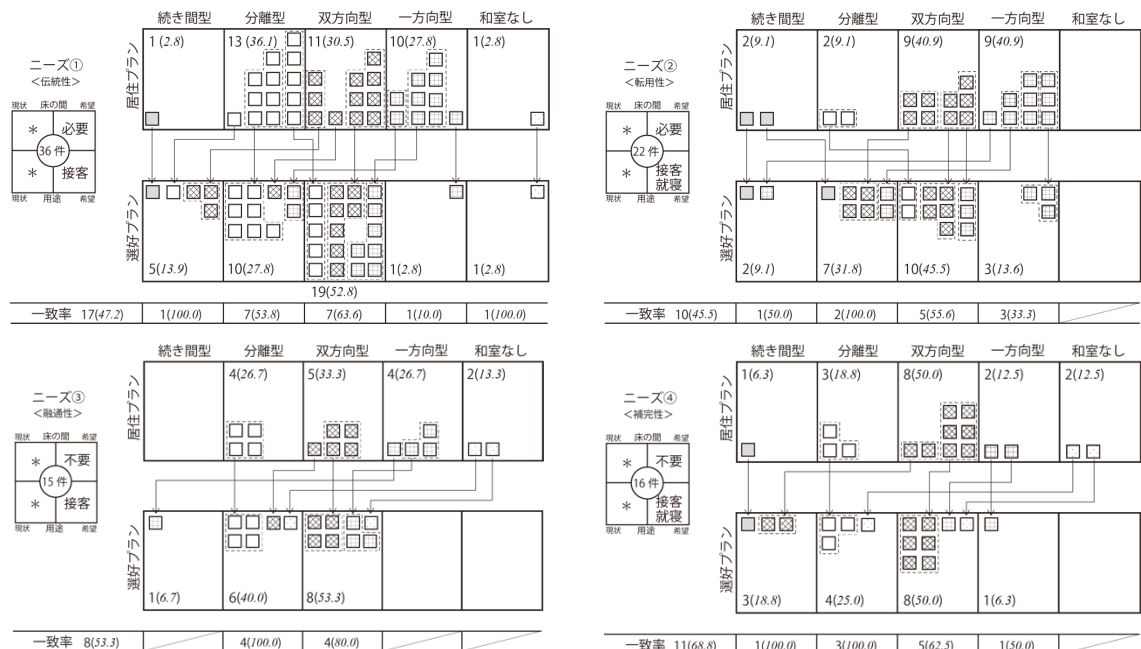


図2 和室に対する居住者ニーズの構造分析

\*は居住者の回答に依拠しない項目

(2) 都市性を考慮した和室ニーズの比較分析 <2018年>

つづいて、地方中核都市（大分市：有効サンプル 108 件）と小都市（竹田市：有効サンプル 74 件）における郊外型住宅団地を対象に、現代における和室の存在基盤についての比較分析を行った。和室に求める志向を「伝統性」・「転用性」・「融通性」・「補完性」に類型化した結果からは、中核都市において従来の「伝統性」志向に代わってその他の類型に分散化しており、いわば多様化が進行していると解釈することができるが、一方小都市では、依然として接客専用の続き間座敷への希望が高く、「伝統性」への強い志向が確認された。しかし、和室の平面構成を「和室 2 室の続き間」「一つ間」「和洋続き間（双方向型）」「和洋続き間（一方向型）」「和室なし」に分類して、居住している（取得した）平面構成と選好との関係をとらえてみると、和室への単独アクセスおよび室数の拡大志向が顕著で、和室志向の根強さが示唆された<図 3, 4>。

具体的な両都市の比較分析結果を述べると、居住および選好については、中核都市と小都市はいずれも温存傾向が強い点が指摘できるが、居住者ニーズには都市性による違いが現れている。和室における「床の間の有無と要否」と「接客専用利用の現状と希望」の 2 軸の指標を抽出し、和室に求める志向を「伝統性」・「転用性」・「融通性」・「補完性」に類型化した結果からは、小都市が依然として「伝統性」志向（すなわち、和室には床の間が必要で接客専用利用を求める）が支配的（55.4%）であるが、中核都市では「伝統性」志向が減少（33.3%）し、これに代わって「転用性」「融通性」「補完性」志向に分散化しており、いわば多様化が進行していると解釈することができる。さらに、居住する平面構成と選好との関係をとらえると、和室への単独アクセスおよび室数の拡大志向が顕著である。すなわち、和室は今後消滅していくのではないかという懸念に反して、現代においても必要層や拡充志向は根強い。

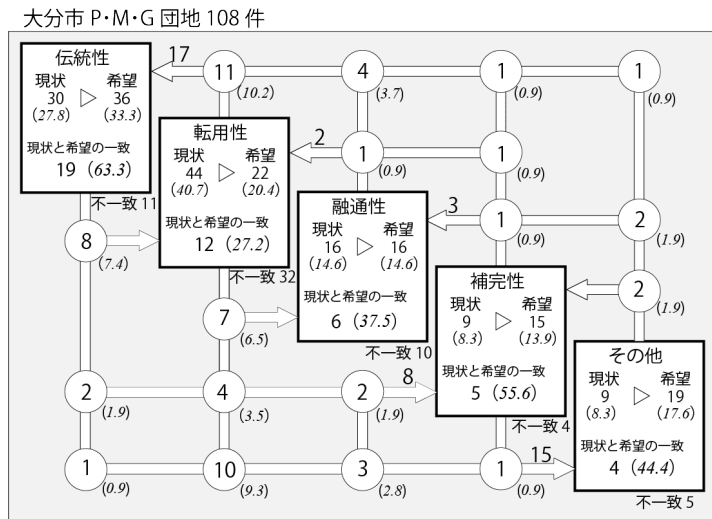


図 3 和室に対する居住者ニーズの都市間比較①（中核市：大分市）

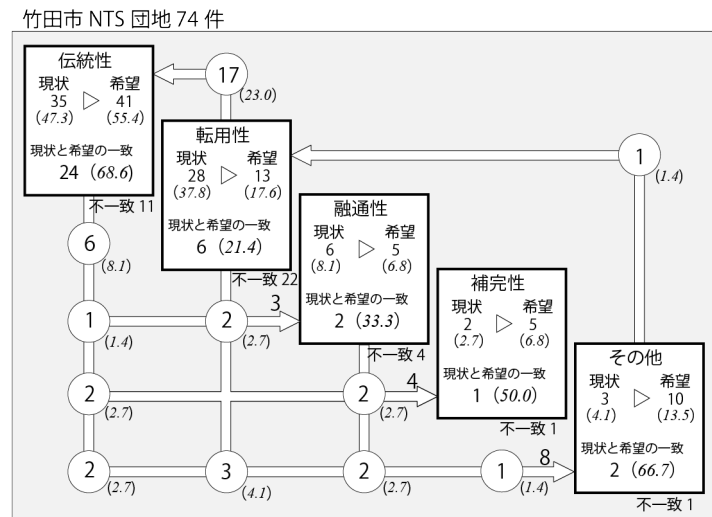


図 4 和室に対する居住者ニーズの都市間比較②（小都市：竹田市）

### (3) 集合住宅における和室の設置状況と計画課題 <2019年>

分譲集合住宅についても、和室の設置状況の経年変化の分析考察を行った。データの内訳は、主として九州の拠点の中核都市であり、わが国の現状を反映しているものと判断できる。これによると、集合住宅において和室はほぼ消滅しているという一般的な観測はあてはまらず、ここ20年間で7割が和室を設けているという現状にあることを示した。居室数が5室の場合には和室設置率が極めて高く、4室でも同様であったが、しかし近年では4室が和室採否の境界となっており、総じて、和室の設置率、面積水準、平面構成、空間構成要素などにおいて、従来の和室の水準からは明らかに低下していることも判明した。とはいえ、和室を温存・継承する志向も認められ、和室の自由度が温存傾向に反映しているものと考察される。

和室であっても机を設置したイス坐の場合や、フローリング床の寝室に布団を敷いて寝起きている場合、また、リビングルームにソファをしつらえながらユカ坐で生活する場合など、空間と生活の対応は様々であるため、その有用性を考察するならば、移動家具や布団類などを「しつらえる」ことによる機能の融通性・転用性が挙げられ、限られた広さでも共用空間だけでなく私室としての生活行為を許容するという面積効率が集合住宅の場合により効果的ではないかと解釈することもできる。

とはいえ、設置率とは相反して、和室へはリビングルームからしかアプローチできない一方向型の動線が多いことから計画意図がLDKの補助空間化していると捉えられる点からみれば、有用性は限定的であるとも考えられ、対症療法的な計画ではない和室の存在意義を問い直す必要がある。

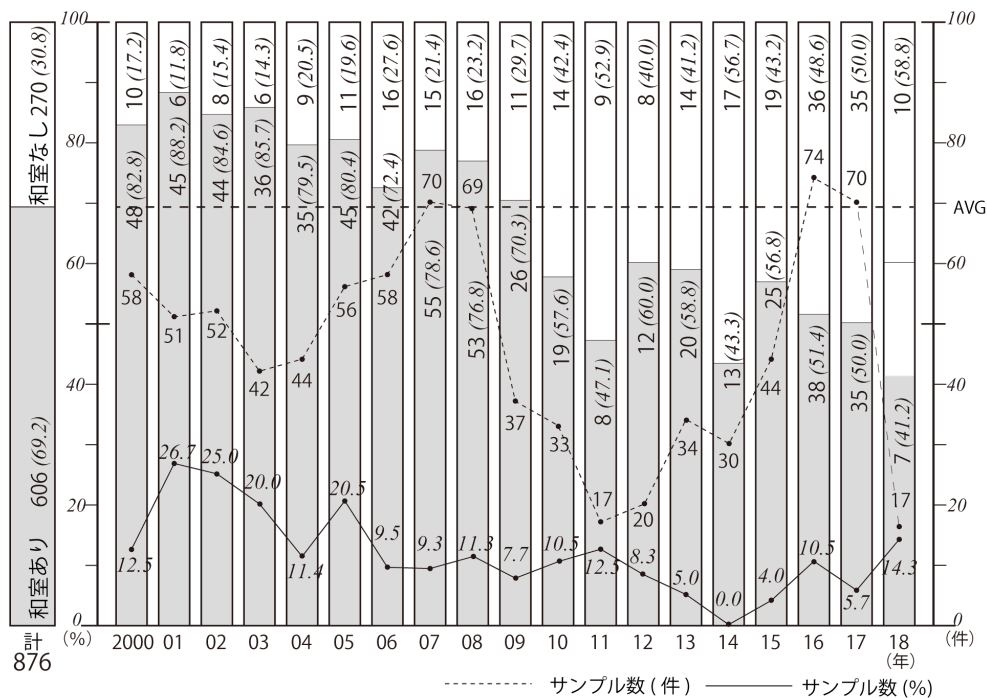


図5 分譲集合住宅における和室の設置状況の経年変化 (福岡県)

#### <参考文献>

- 1) 切原舞子・鈴木義弘・岡俊江：現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その1, その2, 日本建築学会計画系論文集, 第633号, 第643号, pp.2301-2308, pp.1951-1960, 2008.11, 2009.9
- 2) 青木正夫・岡俊江・鈴木義弘：住まい学体系102, 中廊下の住宅, 明治大正昭和の暮らしを間取りに読む, 住まいの図書館出版局, 2009.3
- 3) 拙稿：現代住宅の変容に関する研究 第1-11報, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2009-2013
- 4) 住田昌二 (編)：『現代住宅の地方性』, 勁草書房, 1983.10
- 5) 鈴木成文・初見学：住居における公室の計画に関する研究, (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第8号, pp.119-132, 1982.3
- 6) 江上徹：多目的空間としての居間の計画に関する研究 (梗概), (財)住宅総合研究財団 研究年報 第16号, pp.105-120, 1990.3
- 7) 樋口栄作：住要求のヒエラルキー構造における接客室要求の位置, 日本建築学会計画系論文集, 第400号, pp.43-50, 1989.6

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塩路将和、西田航、和間美月、鈴木義弘	4. 巻 13
2. 論文標題 現代住宅における和室の設置状況と選好について ~大分市の住宅団地を事例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会 住宅計研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田航、和間美月、西村幸太、柴田建、鈴木義弘	4. 巻 14
2. 論文標題 現代住宅における和室への志向性の比較分析 ~大分県内の都市性の異なる2都市を事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会 住宅計研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和間美月、西田航、西村幸太、柴田建、鈴木義弘	4. 巻 14
2. 論文標題 福岡県に分譲集合住宅における和室の設置状況について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本建築学会 住宅計研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 榎本洋子、鈴木義弘、塩路和将、中村龍二
2. 発表標題 和室および床の間の要否ととられ方について： 現代住宅における和室の存在意義に関する研究 第1報
3. 学会等名 日本建築学会九州支部研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和間美月、西田航、柴田建、鈴木義弘
2. 発表標題 集合住宅和室の設置状況と考察（福岡県の事例）～近年の集合住宅における和室の設置状況および平面構成に関する研究 第3報
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西田航、和間美月、柴田建、鈴木義弘
2. 発表標題 集合住宅和室の平面構成の分析（福岡県の事例）～近年の集合住宅における和室の設置状況および平面構成に関する研究 第4報
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考